

御城だより

2022
11

令和の首里城の
姿を求めて

首里城復元の「ギモン」に
応えるQ&A
首里城の美術工芸品
〈琉球王国の歴史ロマンを永遠に〉



令和の 首里城の姿を求めて

～ 見せる復興～



令和4年11月3日に首里城正殿復元整備工事起工式が執り行われました。
令和8年秋の正殿完成に向け復元工事がいよいよ本格化していきます。
首里城復元整備の担当者に復元への想いを伺いました。

聞き手：御城だより編集部

沖縄の前は奈良の飛鳥歴史公園事務所で勤務されていたのですか？

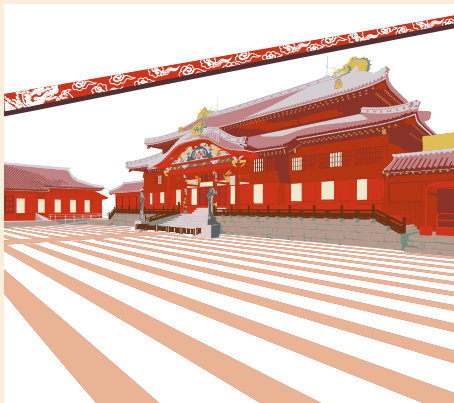
熊本地震で被災した熊本城の 再建支援にも携わりました

沖縄に配属となったのは首里城火災後の令和2年1月からで、その前は奈良の国営飛鳥歴史公園事務所で約2年半の間、平城宮跡区域の新規開園や南門復元事業を担当していました。奈良の前は国土交通本省において熊本地震で被災した熊本城の再建支援にも携わりました。復元事業に携わるのは今回で3回目となります。

まさに復元のスペシャリストですね

今回の首里城復元について、古木副室長が一番大事にしていることは何ですか？

「仏作って魂入れず」となってはならぬ



常に心に留めているのは「仏作って魂入れず」となってはならぬということです。ただ復元するだけではなく、その先にある復興を成し遂げないと意味がないと考えています。

例えば、奈良の大仏は1300年以上前から存在していて、これまで何回も建て替えられていますが、今でもたくさんの方が集まる。もちろん観光地として人気もありますが、その背景に信仰や宗教といった「心(魂)」があるので、これだけの魅力を1000年以上に渡って発信続けられている気がしています。

翻って首里城を考えてみますと…

首里城を再建することは国営公園事業として至上のミッションであり、また二度と火災等で失われることがないように十分な防災・防火対策も講じていきますが、こうして再建される令和の首里城はあくまで建物(ハコ)のみです。これに加えて、その中に「家主」が入ることではじめて、令和の首里城が本当の意味で甦ると考えています。

首里城には琉球王国時代は国王がいましたが、今はいわゆる家主はいません。それに代わる新たな存在を令和の首里城へ入魂しなければならないように感じています。

そして、そのような存在というのは、今回の火災で改めて芽生え始めた沖縄県民や国内外のウチナーンチュをはじめとした多くの方々の首里城を慕う想い、首里城の復元を支えてきた沖縄の伝統文化や匠の技、首里城の姿を探求し続ける歴史研究の積み重ねなど、目に見えない様々な価値の集合体ではないかと考えています。

建物の復元はある意味で令和の首里城の始まりでしかなく、さらにその中へ「魂」を入れ、令和の首里城の姿を目指していかなければならないと感じています。



内閣府沖縄総合事務局
国営沖縄記念公園事務所 建設専門官
首里城復元整備推進室 副室長
古木 治郎 氏



令和の首里城へ「魂」を入れるために具体的に取り組んでいることは何ですか？

復興への
あゆみ



現場の“生”の姿を皆さんに届けたい

今回の首里城復元では「見せる復興」をテーマに掲げて、復興の現場だけではなく、職人たちや作業員が働いている様子など、できるだけ現場の“生”の姿を皆さんに届けたいと考えております。その姿を見せることで首里城の存在や今回の復元事業の存在を近く感じてもらえるのではないのでしょうか。

そこで、復元過程の節目には必ず報道機関を通して現場の様子を公開をしています。また、首里城公園ホームページの「復興へのあゆみ」というサイトで、復元事業の取り組みについてわかりやすく紹介したり、YouTubeを使って「今の首里城」を発信したり、情報発信に力を入れています。



沖縄の学生×首里城
写真でつむぐ復興への想い

復興に参加できるボランティア活動

他にも、一方的に発信するだけでなく、人々の復興を願う心と向き合えるような取組みや機会をなるべく多く作るように心がけています。瓦磨きやシャモットづくり等、地域の人々が自由に参加できるボランティア活動がその一つです。最近では「写真で紡ぐ首里城復興」をテーマに地元の高校生に正殿復元現場の写真を撮ってもらいました。

沖縄の高校は写真甲子園でも優勝するほどレベルが高く、高校生の目線でプロ顔負けの、とても味のある写真を撮ってもらいました。こちらは「復興へのあゆみ」で公開しておりますのでぜひご覧ください。これからも色々な切り口から、等身大でフランクに復元の現場の様子をお届けしていきたいです。

古木副室長は復元事業の意義についてどのようにお考えですか？

復元事業とは“ひと” “もの” “こと”への「未来への投資」

私は、復元事業とは“ひと” “もの” “こと”への「未来への投資」だと考えています。今回の復元で考えますと、沖縄独特の建築様式や伝統技術、工芸技術を継いでくれる職人＝“ひと”を育てるという面もあるだろうし、“もの”は新しい木材が使われ、弁柄なども更新されます。“こと”については、例えば、木遣行列での「^{きやり}国頭サバクイ^{くんじやん}」など、沖縄の伝統的文化や営みにちなんだものが令和版として再現されます。そのような「令和の復元」があったからこそ継承できたものや生まれ変わることができたものを大事にしていけないといけません。



首里城正殿壁面グラフィック

古木専門官が考える復元を通した「未来への投資」



次世代を担う職人や技術者、
研究者などの育成

沖縄の未来を担う若者や
子供たちの育成



首里城を支える琉球の材
(木・土・弁柄…)の更新
復元を支える匠の技
(琉球伝統技術)の継承



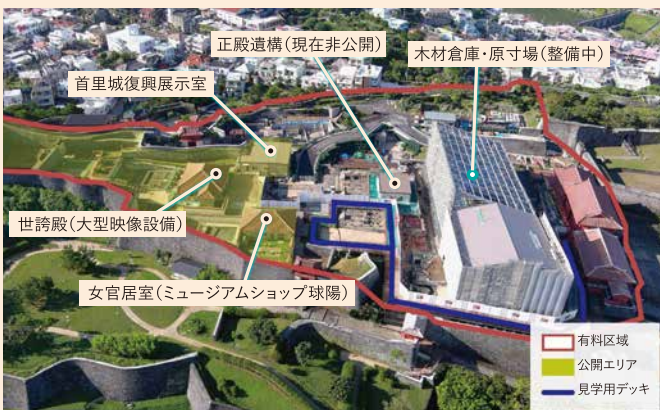
往時から伝わる故事や
伝統芸能等の令和版
としての再現
新たな首里のまちや
地域の営みの創出

復元は“過去”と“今”をつなげるタイムトンネル

同時に、私は復元されることによって“過去”と“今”をつなげるタイムトンネルが生まれるような気がしています。往時の人々が見ていた景色を復元によって現在でも同じように見ていると考えるとロマンチックに感じますよね(笑)。

起点としての「現在」と終点としての「往時」との間の歴史の厚みを改めて体感できる。それによって首里の町の歴史を知るきっかけや自分達らしいアイデンティティを再確認できる。その高揚感のような副次的な効果も大事にしなくてはいけないと思っています。

最後に「令和の首里城」復元後の未来に向けて抱負を聞かせてください



「令和の首里城」のプラットフォームづくり

もっと地域の方々を巻き込んで、首里城に想いを寄せる人たちが緩やかに集えて交わるような「令和の首里城」のプラットフォームをつくりたいですね!“集い”と“学び”と“営み”がゆるやかにつながるような。最近ではメタバースの世界も注目されていますので、リアル×バーチャルを上手く掛け合わせて何かできないかと思いついています。また、安土桃山時代に信長が行った経済政策「楽市・楽座」のような精神も必要だなって、最近よく思います。

「楽市・楽座」では、桃山城のふもとで市場開放と規制緩和を行うことにより城が栄えたという歴史があり、令和の首里城でも新しい試みやイベント等を規制して排除するのではなく、なるべくオープンに、懐の深さを発揮しないとバリューアップできないと思います。まさにオープンイノベーションのように、色々な人や企業・団体を集わせて、交わらせて、繋げて、イノベーションを起こすような仕組みづくりにトライしていきたいですね。

首里城復元の「ギモン」に応えるQ&A

Q1 奉神門の向こうに見える建物は何？

A 木材倉庫・加工場と原寸場です。首里城正殿を建てるための木材を保管し、加工する場所です。1階が木材を加工する「加工場」、中2階が原寸大の設計図を広げる「原寸場」、2階が加工した木材を保管する場所になっています。



大きな窓から作業の様子が見られます。各作業場所を紹介するパネルも設置しています。



Q2

木材倉庫・加工場 原寸場の中は どうなっているの？

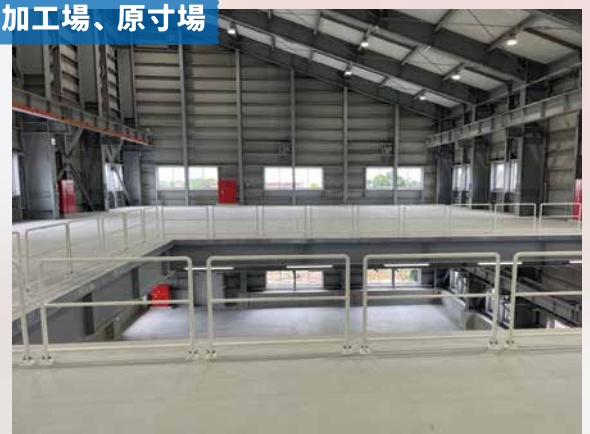
A 階段を上ったところに大きな窓があり、そちらからは中の様子を見ることができます。現在は、木材が保管されています。今後の作業の様子を紹介する映像もご覧いただけます。



▲建物の1階。ここで加工した木材をクレーンを使って2階へと引き上げます。



▲原寸場。来場者が原寸場を外から見ることのできる窓があります。



▲2階の木材倉庫。中央が開いているのは、1階から木材を引き上げるためです。

Q3 原寸場はなぜ必要なの？

A 正殿唐破風のカーブを作成するのに原寸大の設計図が欠かせません。小さく描かれたものを単に拡大すれば良いというのではなく、精度の高いものを造るには同じスケールの設計図が必要なのです。



平成の作業風景。右側の白紙に描かれた原寸大の図面と彫刻したものを並べて確認しているところ。

現在の工事の様子や、過去に行われた復元工事の貴重な写真と共にご紹介します。

平成の復元



平成に建てられた、素屋根。
この中で正殿が造られていました。



令和の復元



▶素屋根の中で正殿復元工事が行われます。

Q4

今後どうなるの？

A 首里城正殿を建てるため、正殿を風雨から守るため、「素屋根」が造られます。建物全体を覆うため、かなり大きなものが建ちます。

素屋根ができれば、木材倉庫の壁を取り払い、合体する予定です。令和8年の正殿完成を目指し、令和4年の11月から本格的に着工しました。

Q5

戦前はどうか？

A 昭和8年に首里城正殿の解体修理が行われています。この写真は文部省の建築技師で首里城の改修に携わった柳田菊造氏が撮影したものです。

戦前に撮影した貴重な写真です。



上下写真3枚とも 柳田菊造撮影(昭和8年) (一財)沖縄美ら島財団 所蔵

戦前に建てられた素屋根



南殿側から見た正殿素屋根



昭和8年の解体修理の際、素屋根が建てられました。風雨をしのぎ、台風にも耐えられるよう強度も計算し建てられています。これにより工期が管理しやすくなり、経費節減にもつながったと言われています。

琉球文化財研究室 幸喜室長教えて!

首里城の美術工芸品 ～琉球王国の歴史ロマンを永遠に～

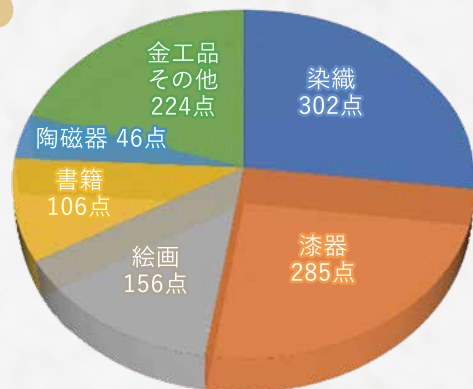


一般財団法人 沖縄美ら島財団
総合研究センター 琉球文化財研究室
室長 幸喜 淳氏

首里城関連の美術工芸品は どのように集められるのですか?

首里城は沖縄の歴史文化を象徴する貴重な文化遺産です。しかし沖縄戦において、多くの文化遺産が灰塵に帰し、国内外に散逸しました。首里城関係の文化遺産を集め、復元し、首里城等で一般公開していくため、沖縄県や県内市町村、各種団体等多くの方々との協力を得て、「首里城基金」が(一財)沖縄美ら島財団に設置され、これまで文化遺産収集事業を続けてきました。

これからの新たな文化を創造する上においても、偉大な先人たちが残してくれた貴重な遺産を収集し、広く紹介することは大きな意義があります。



首里城の美術工芸品は王国時代に 作られたものを収集しているのですか?

琉球王国時代から少なくとも明治の中頃、まだ琉球王国の技術の残り香がある近代になる前の美術工芸品を「首里城基金」を活用して収集しています。

火災により美術工芸品は どうなったのでしょうか?

令和元年10月31日、首里城は火災で焼失し、貴重な美術工芸品も391点が焼失しました。収蔵庫や展示室から搬出された資料は、沖縄美ら島財団事務所や沖縄県立博物館・美術館に移され現存確認が行われました。1点ずつ被害を確認した結果、絵画や漆器、染織の多くに、熱や水害などの影響による劣化が見られました。さらに364点について、修理が必要とされています。焼失した『雪中花鳥図』や『玉冠(復元品)』等は、模造復元製作する予定です。

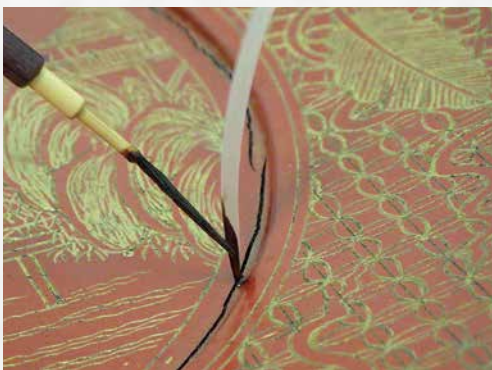


事務所に運ばれた収蔵品を1点ずつ
開き被害を確認している様子。

被災した美術工芸品の修理作業に どのくらいの時間がかかりますか?

既にその技術が失われている場合もあり、色々な技術を解明することが復元事業を立ち上げるのに重要な情報となります。中には、これ以上被害が進まないかのみを経過観察をする場合もあります。

漆器や陶磁器等、すぐに修理が可能な物については令和3年度からスタートしていますが、製作資料を整えるまでの時間、調査の時間が長くなります。物によっては、修理方法を確立するところから取り組まなければいけないこともあり、最低でも20～30年はかかると思われます。



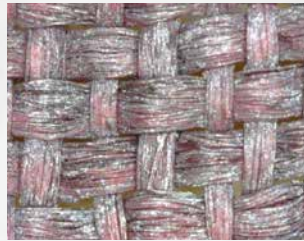
しゅうろしきんすいろうかくじんぶつちんきんざら
『朱漆山水楼閣人物沈金皿』の修理の様子。

被災した資料

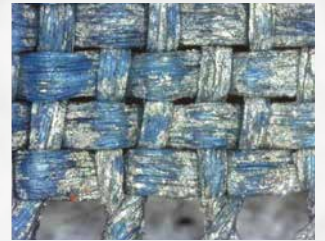
『紹織染分地鶴と松梅菊両面紅型胴衣』染織



この染織資料には、繊維素材に絹糸、色材には顔料が使用されています。軽くて柔らかい質感が特徴的でしたが、火災の高熱によりシワになった状態が固定され、絹糸の硬直や鉛白が使われた模様部分に変色を確認しました。



えんじ えんぼく
臙脂+鉛白



ペロ藍+鉛白

修理した資料

『呉須線彫牡丹文酒注』陶芸

琉球王国時代の壺屋焼『呉須線彫牡丹文酒注』はカラーフィル技法で修理を行いました。日本古来の金継ぎ技法とは異なり、英国で発展してきた陶磁器文化財の修理方法です。



剥離部分の接着

剥離した注ぎ口の接着剤には、耐久性があり、かつ溶剤によって本体にダメージを与えずに剥がすことのできるエポキシ系を使います。



接合部分の色合わせ

数種類の顔料(絵具)を混ぜ合わせて本体に近い色を作り、接合部分の細かいひび割れ部分(欠損部分)に充填します。

展示の際に違和感のないように、しかしよく見ると接合部分が見えるように仕上げます。

今後、美術工芸品の修理はどのように進めていきますか？

被災した美術工芸品の修理・管理体制等の検討を目的に、令和元年度に第三者委員会「首里城美術工芸品等管理委員会」を設置、計4回の委員会や、専門分野のワーキングを開催し、調査・修理・復元に関する提言を取りまとめたいただきました。

この提言をもとに、美術工芸品等のオリジナルの価値を損なわないよう、できるだけ当時の姿に忠実に、同じ技術や材料を用いて修理や模造復元を行います。分野ごとの有識者・専門家に監修いただき指導・助言を得ながら、文字や写真等による記録を蓄積するとともに、修理や模造復元に関わる人材育成も進めていく予定です。これらの事業も、首里城の復興を願う皆様方より寄せられた「首里城基金」が活用されています。

	2020年	2025年	2030年
絵画	修復:5件 模造復元:5件		
漆器	修復:44件 模造復元:6件		
染織	修復:2件 模造復元:6件		
書籍	修復:2件 模造復元:7件		
陶磁器	修復:12件		

首里城基金

未来へ残そう沖縄の心

貴重な美術工芸品等の
収集・復元・保存・人材育成に向けて



首里城は沖縄の歴史文化を象徴する貴重な文化遺産でしたが、沖縄戦において、多くの文化遺産が灰塵に帰したり、国内外に散逸してしまいました。

首里城の展示物は、国内外に散逸した首里城関係の文化遺産を収集し、復元し、首里城等で一般公開していくため、県、市町村、各種団体、また多くの方からの協力を得て、首里城基金が財団に設置され、これまで文化遺産収集事業を続けてまいりました。しかし、令和元年10月31日、首里城は火災で焼失し、貴重な美術工芸品も391点が焼失しました。

首里城の再建に向けた動きが加速するなか、偉大な先人たちが残してくれた貴重な美術工芸品等の遺産を収集・復元・保存し、首里城で展示できるよう、また、技術の継承や人材育成も進めて行けるよう、首里城基金の造成に皆様方のご支援、ご協力を賜りますよう心からお願い申し上げます。



首里城基金の仕組み

首里城基金は、首里城での文化遺産収集事業に役立てられています。

基金への寄付金等

基金の運用益

文化遺産収集事業
首里城に関する資料収集

収集 国内外に散逸した文化遺産を収集します。

復元 破損または消失した遺産を復元します。

保存 次の世代のために文化遺産を保存します。

育成 修理・復元・保存に必要な人材育成をします。

展示・一般公開

下記QRをクリックすると読み込み先ページにリンクします！

首里城公園HP

